

# 学力格差は幼児期から始まるか？

～保育と子育ては子どもの貧困を超える鍵になる～

Does economical gap academic create achievement gap?:  
How child care and education compensate poverty.

内 田 伸 子\*

## 【要約】

現在、我が国では学力低下が問題になっている。学力格差は家庭の世帯収入を反映するので、世帯収入の低い家庭の子どもの学力が低いのではないかと指摘されている。学力格差は幼児期から始まるのであろうか。学力基盤力となるリテラシー（読み書き能力）や語彙力、親子の会話も経済格差の影響を受けるのであろうか。本稿では現代の子育ての実態を探り、幼児期の生育環境や保育環境が子どもの学力にどのような影響を及ぼすのかについて国際比較短期縦断調査に基づいて考察する。

## 1. 学力格差は幼児期から始まるか

### 1.1. 経済格差はリテラシーの習得に影響するか

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある（内田, 1989; 2007; 東他, 1995）。幼児期から習得しはじめるリテラシーや語彙力は小学校以降の学力テストの成績とどのように関連しているのであろうか。教育社会学者やマスコミは「学力格差は経済格差を反映する」と指摘している。学力格差と経済格差は見かけの相関はあるが、経済格差と連動して、学力低下をもたらす媒介要因が隠れているのではなかろうか。そもそも、経済格差は子どもの認知発達や親子のコミュニケーションにどんな影響を及ぼすのであろうか。

リテラシーや語彙の習得に及ぼす社会・文化・経済の要因の影響について明らかにするため、日本・韓国・中国・ベトナム・モンゴル、各国大都市（東京・ソウル・広海・ハノイ・ウランバートル）の3, 4, 5歳児それぞれ3,000名とそ

の保護者や保育者を対象にして短期縦断調査を実施した（内田他; 2009a; 2009b; 2011; Ucida & Ishida, 2011; 内田・浜野, 2012）。

リテラシーの発達について幼児3,000名に個別の臨床面接調査を実施した。保護者には世帯収入、早期教育への投資額、親の学歴、蔵書数やしつけのスタイルなどについてアンケート調査を行った。幼稚園や保育所の文字環境や保育形態などは保育者（幼稚園教諭や保育士）を対象にアンケート調査を実施した。

調査対象者の世帯収入によって高所得と低所得に分け、経済要因が子どものリテラシーや語彙力とどんな関連があるかを比較した。

「読みテスト」「書きテスト（図形の模写）」は1964年調査、1995年調査（6章参照）と同じ課題を使用した。語彙検査はどの国でも標準化されている回が語彙検査を用いた。

日本（東京）、韓国（ソウル）、中国（上海）のいずれもリテラシーと世帯収入とは相関がみられなかった。幼児期の終わりには読みや書きの準備状態（手指の運動調整能力や音韻的意識）は経済の要因とは関連がなかった。しかし、絵

\*江戸川大学こどもコミュニケーション研究所顧問・お茶の水女子大学名誉教授

画語彙検査で測定した語彙力については世帯収入との相関が検出され、加齢に伴い関連性が強まることが明らかになった。世帯収入の高い家庭の子どもの語彙力は低所得層の子どもよりも豊かであることが明らかになった(図1)。

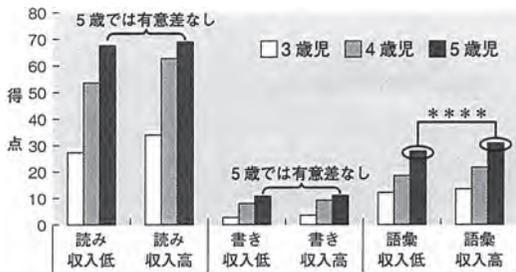


図1 リテラシーの修得と経済格差  
\*\*\*\*:  $p < .001$  (内田・浜野, 2012より)

### 1.2. 通塾のタイプは関連がない

家計の豊かな家庭では、習い事をさせているのかかもしれないので、幼児期の早期教育の影響を調べてみた。読み・書き・語彙と通塾との関連をみると、「読み能力」と「模写力」においては通塾との関連はなかったが、語彙力は通塾と関連していた。習い事の種類—芸術系・運動系(ピアノやスイミング、体操教室など)と学習系(受験塾や英語塾)—は語彙点とは無関係であった(図2)。習い事の中身が語彙を豊かにするわけではなく、塾に通うことにより、幼稚園や保育園の保育者や仲間とは別の大人や子どもに出会うことで、コミュニケーションの機会や多様性が増すためであろうと推測された。

### 1.3. 保育形態は子どもの語彙力と関連がある

読みテストや模写力には幼稚園か保育所かといった園種の違いはなかったが、語彙力は保育

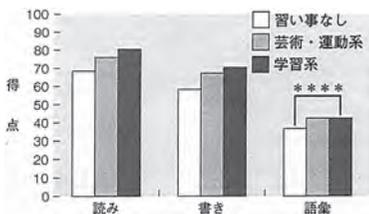


図2 習い事の種類と読み・書き・語彙との関連  
\*\*\*\*:  $p < .001$  (内田・浜野, 2012より)

形態による違いが検出された。自由遊びの時間が長い「子ども中心の保育(Child-centered Education)」の幼稚園や保育所の子どもの語彙得点が高く、小学校準備教育として文字や計算、英会話や体操などを教えている一斉保育の幼稚園や保育所の子どもの得点が低いという結果が明らかになった。しかも3歳、4歳、5歳と加齢に伴い、その差は大きくなる傾向が見られた(図3)。この結果はソウルでも全く同じであった。上海は全てが保育所であり、クラスサイズが大きいので一斉保育にならざるを得ない状況にある。そこで、子ども中心の保育は行われていないため、この分析は行わなかった。これらのことから、文字や計算は子ども遊びや生活の中にもちこまれるものであり、一斉保育で文字指導や計算指導の形で大人から教えられるものではないことが示唆される。

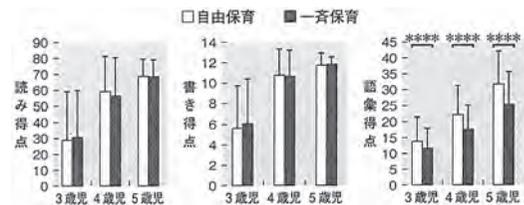


図3 保育形態による語彙力の差(内田・浜野, 2012より)  
\*\*\*\*:  $p < .001$

### 1.4. 親のしつけスタイルと子どもの語彙力の関連

子どもへの関わり方、つまり、子どものしつけのスタイルはリテラシーや語彙力に関連があるかを調べるために、まず親はどのようなしつけをしているかを分析した。その結果、調査に参加した親のしつけスタイルは、①「共有型」(子どもとのふれあいを大切に、楽しい体験を親子で共有する)、②「強制型」(禁止や命令、力のしつけを多用し、子どもを親に従わせようとする)、③「自己犠牲型」(子どもが何より大切に、子育てで負担感が大きい。育児不安か放任・育児放棄に二極化)の3つのタイプに分かれた。

リテラシーとどの要因が関連するかについて明らかにするために「共分散構造分析」(一つ一つの要因を統制してリテラシーと語彙得点がどの要因と相関するかを検出する統計法)にかけたところ、共有型しつけを受けている子どもの

リテラシー得点や語彙得点との相関が有意であり、共有型しつけと家庭の蔵書数、リテラシーや語彙得点にも有意な相関が得られた(図4)。

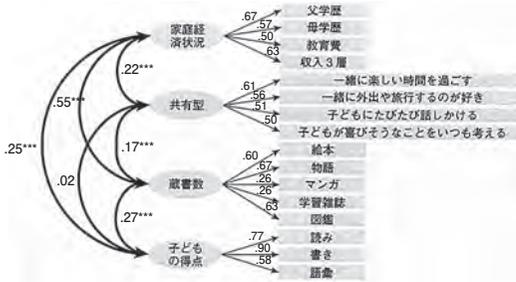


図4 共有型しつけとリテラシー得点の関連  
\*\*\*:  $p < .001$  (内田・浜野, 2012より)

一方、強制型しつけを受けている子どものリテラシー得点と語彙得点は低くなることになった。強制型しつけの家庭の蔵書数も少ないという関連も有意であった(図5)。

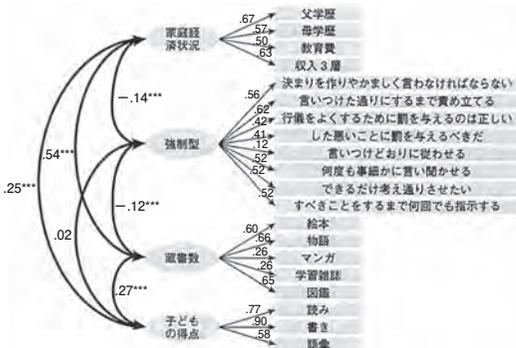


図5 強制型しつけとリテラシー関連  
\*\*\*:  $p < .001$  (内田・浜野, 2012より)

家庭の所得の高低にかかわらず、共有型しつけをしている家庭には蔵書数が多く親自身も読書が好きであり、子どもにも乳児期から絵本の読み聞かせをしていた。読み聞かせ体験の多い子どものリテラシー得点・語彙得点は高かった。

逆に、“決まりを作りやかましく言わなければ気が済まない”、“言いつけたとおりにするまで子どもを責め立てる”、“行儀をよくするためには罰を与えるのは正しい”、“しつけのために子どもをたたくこともよくある”、“悪いことをしたら罰を与えるべき”、“できるだけ親の考えの

とおりに子どもを育てたい”、“すべきことをするまで何回でも責め立てる”など、トップダウンの強制型しつけスタイルのもとでは、家庭の所得の高低にかかわらず、子どものリテラシー得点と語彙得点が共に低く、蔵書数も少ないという特徴がみられた。

以上から、家庭の所得にかかわらず、大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもの語彙力が豊かになることが明らかになった。

表1に、国際比較短期縦断研究の結果をまとめた。

表1 経済格差と読み書き能力・語彙力との関連  
——日韓中越蒙国際比較短期縦断研究  
(内田・浜野, 2012)

<ul style="list-style-type: none"> <li>●読み書き能力については所得との関連はないが、語彙力については所得の高いほうが豊かであった。</li> <li>●指導の形で教えられる一言保育よりも、自由遊びの時間が長い「子ども中心の保育」のほうが語彙力が豊かになる。</li> <li>●所得の高低にかかわらず、強制型のしつけよりも共有型のしつけをしている家庭のほうが、読み書き能力・語彙力共に高い。</li> <li>●所得よりも、触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもの語彙力が豊かになる。</li> </ul>
---

## 2. 幼児期のリテラシーは児童期の学力テストに影響する

幼児調査に参加した5歳児(920名)を小学校1年(321名)まで追跡した。小学校1年生の3学期に語彙検査(芝式語彙検査)と国語学力検査(PISA型読解力検査)を受けてもらった。幼児期の語彙能力(絵本の読み聞かせ体験)と書き能力(図形の模写能力、造形遊びやブロック遊びをよくしていた手指の巧緻性の高い子ども)は、小学校の国語学力テストの成績が高い(図6;表2)。

世帯収入は、小学校1年の国語学力(PISA型学力テスト)や語彙力とは関連はなかったが、しつけスタイルは国語学力や語彙力と有意な因果関係が認められた。幼児期に共有型しつけを受けた子どもたちの国語学力や語彙力が高く、逆に、幼児期に強制型しつけを受けた子どもは国語学力や語彙力が低くなる。

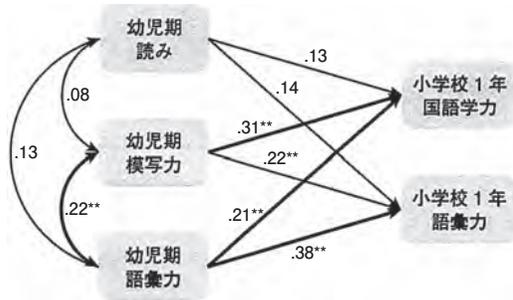


図6 幼児期の読み書き能力・語彙力と小学校での国語学力の関係 (内田・浜野, 2012より)

\*\*: $p < .01$

表2 小学校の学力への影響因

1. 幼児期の語彙の豊かさと指先の器用さは小学校の国語学力に影響する。
2. 幼児期のしつけスタイルと子ども中心の保育は小学校での国語学力に影響する。

しつけスタイルや保育形態は親がコントロールできる。

### 3. しつけスタイルと親子の会話の質の違い

子どもは身近な大人との相互作用を通して語彙を獲得していく。子どもが大人との相互作用に、主体的、自発的にかかわるときに語彙が増え、言語発達が促されるという知見は多い(例, Fletcher & Reese, 2005; Kang, Kim, & Pan, 2009)。これらの知見では、読み聞かせの量ではなく、どんなふう読み聞かせるかが、言語発達や認知発達、読み書きの習得に影響していることが示唆されている。また親子の問題解決場面での母子相互作用については、ワーチら(Wertch and et al., 1980)が、子どもがパターンブロック課題を解いているときに難題にぶつかり、先に進めないことを敏感に察知して適切な援助や足場(scaffolding)を与えることによって、子どもが先に進めるようになると報告している。しつけスタイルにより援助や足場の架け方が違ってくると想定される。これらの仮説を検証するため、家庭訪問調査を実施

した(齋藤・内田, 2013a; 2013b)

#### 3.1. 子どもを伸ばすことばかけ

高所得層で高学歴の専業主婦の中からしつけのスタイルのみ異なる共有型と強制型、それぞれ28組ずつ合計56組を対象にしてブロックパズル課題(図7)と絵本の読み聞かせ場面(図8)での親子のやりとりを観察した(齋藤・内田, 2013a; 2013b; 内田, 2017b)。最後の頁での共有型の母親と強制型の母親のことばかけの違いを表3に例示する。

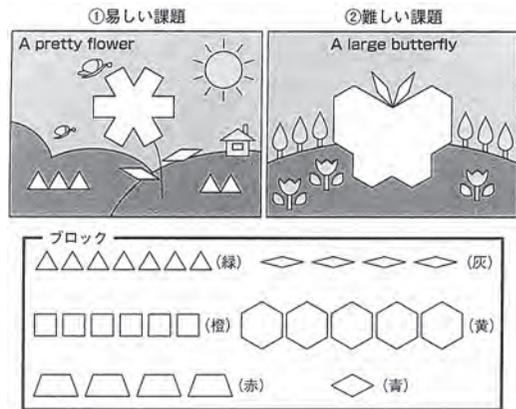


図7 ブロックパズル課題 (齋藤・内田, 2013aより)

6種類のブロックを2種類の課題シートの空白部分に親子共同で置くように求め、その様子を観察する。

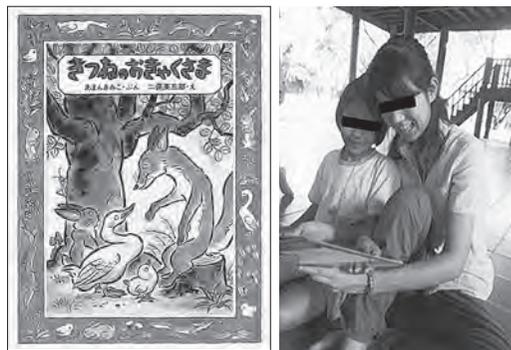


図8 絵本の読み聞かせ場面の母子のやりとりの様子 (齋藤・内田, 2013aより)

(あらすじ) ひよことあひるとうさぎを太らせて食べようとしていたきつね。しかし、純粋な3匹と一緒に暮らすうちに心は変わり、最後はおおかみから3匹を守って死んでしまう。  
(作:あまんきみこ・絵:二俣英五郎『きつねのおきゃくさま』)

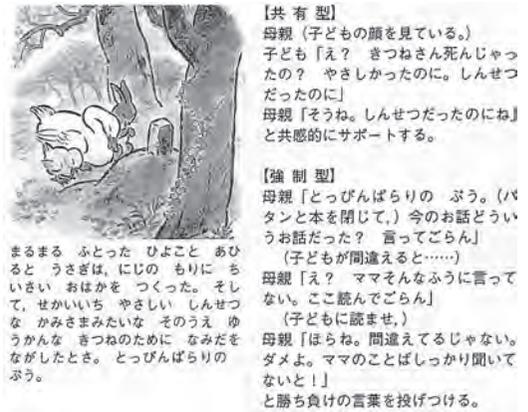
表3 問題解決場面や絵本の読み聞かせ場面でみられる母親のことばかけとしつけスタイルとの関係  
(内田・浜野, 2012より)

【共有型 (洗練コード)】	【強制型 (制限コード)】
<ul style="list-style-type: none"> <li>●考える余地を与える援助的なサポートをする。</li> <li>●子どもに敏感で子どもに合わせて柔軟に調整する。</li> <li>●3つのH (ほめる・はげます・ひるげる) のことばかけが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●考える余地を与えない指示的・トップダウン的な介入をする。</li> <li>●過度な介入、情緒的サポートの低さがみられる。</li> <li>●3つのHのことばかけがない。</li> </ul>
↓	↓
<p>子どもは遊びに熱中し、楽しそうな様子。主体的に探索し、自律的に考えて行動する。</p>	<p>子どもは親の指示を待ったり、顔色をうかがったりと、緊張している様子。主体的に探索せず、他律的な行動をとる。</p>

共有型しつけの親は、子どもに考える余地を与えるような「洗練コード」のことばかけが多く、子どもをほめ、認め、励ますことばかけが多かった。一方、強制型しつけの親は、禁止や命令口調が多く、子どもにトップダウンに指令する「制限コード」で話しかけることが多く、情緒的サポート (ほめる、はげます など) が見られなかった。

共有型の母親たちは、子どもに対して敏感で、指示するのではなく、あくまでも子ども自身に決定を委ね、それをわきから支える援助的な関わりをしていた。子どもも自発的な探索行為が多く、自分自身で考え、工夫して課題を遂行しようとする態度が見られた。課題に取り組んでいる親子の様子は、リラックスしていて楽しそうであった。一方、強制型の母親は、子どもの解決中に過度な干渉や介入をし、母親が想定した「正解」に到達するよう強制している姿が見られた。それに対応するように、子どもは母親の指示を待ち、自発的・主体的に探索しようとはしなかった。困ったときにはすぐに母親に援助を求め、母親の指示に従い、母親に依存しながら課題を遂行しようとした。母親が働きかけるとすぐにそれに従ってしまう態度からは、子どもの自律的思考力や探究心が育たないのではないのかと推測される (図9)。

強制型しつけのもとではどうして子どもは伸びないのだろうか。社会心理学では楽しい気分ときには記憶力が高まり、不快なときには記憶力が低下するという「気分一致効果」が見出されている (富山, 2003)。



(作：あまきみこ・絵：二俣英五郎『きつねのおきゃくさま』)

図9 共有型と強制型の母親の子どもへのことばかけの違い  
(齋藤・内田, 2013aより)

脳科学でも強制型しつけのもとで記憶力が低下してしまう証拠が見出されている。大脳辺縁系のストレスを感じる「扁桃体」で緊張や不快を感じると、記憶を司る「海馬」で失敗例がよみがえり、ほかのことを考えられなくなり、頭が真っ白になってしまうのである。扁桃体で快感情が喚起されると、情報伝達物質が「ワーキングメモリー」に送られ海馬が活性化するので、体験の記憶を記憶貯蔵庫に蓄えられるのである。

「遊び」は仕事に対立する概念ではない。怠けることを意味しているのでもない。子どもにとっての遊びとは、ころも・あたま・からだが生かされている状態なのである。漢字学者の白川静 (1970) は「遊びは自由と創造の空間」とあると指摘している。自発的な遊びを通して子どもは学習する。楽しく活動しているときには「好きこそもの上手」という状態になり、自立的・自律的に考える力も伸びるのであろう。

#### 4. 遊びと将来の学力との関連

国際比較追跡研究や家庭訪問調査からは幼児期の親のしつけや子ども中心の保育が小学校の学力テストに影響することが明らかにされた。幼児期の過ごし方は大人になるまで影響するであろうか。この問題を明らかにするため、23歳～28歳までの成人の娘・息子を2、3人育てた

親2,000名を対象にして就学前にどんなことに力を入れたか、どんなしつけをしたかについて、ウェブ調査を実施した(内田, 2014; 2017a; 2017b; 2017c; 2017d)。

受験偏差値68以上の大学・学部を卒業して難関試験(司法試験や国家公務員試験, 調査官試験, 医師国家試験など)を突破した娘や息子をもつ親は子ども時代に思いっきり遊ばせたという回答が有意に多かった。さらに、親は子どもと楽しい時間をいっしょに過ごすことが多く、子どもの好きなことに集中して取り組ませたと答えている。絵本の読み聞かせも十分に行っている(図10)。「共有型しつけ」が有意に多かった(図11)。

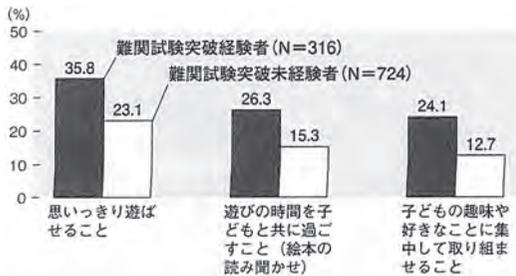


図10 小学校就学前の子どもに意識的に取り組ませていたこと (内田, 2014より)

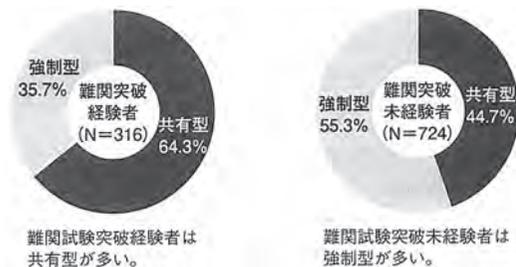


図11 難関試験突破経験者と親の子育てスタイルとの関連 (内田, 2014より)

では、なぜ、乳幼児期のしつけが大人になるまで影響をするのであろうか。親が子どもの自発性・内発性を大事にしている、子どもが熱中して遊ぶのを認め、「面白そうだね」と共感してくれる。子どもは大好きな親に誉められると嬉しいし、達成感も増す。小さな成功経験を重ねながら自信ももて自尊心が育っていく。難題をつきつけられても、「きっと自分は今度も自力で

解決できる」という気持ちになり、回復力(レジリエンス)が高まり、挑戦力もわいてくる。少々のストレスにもめげずあきらめずに挑戦し続けることができるであろう。こうして大人になるまで、自力で達成することを積み重ねた結果、難関試験を突破する力が育まれたのかもしれない。

**【結論】 調査結果のまとめ**

以上の調査結果に基づき、「学力格差が幼児期から始まるか?」という問いに回答したい。「学力格差や経済格差を反映している」というのは、学力と経済格差の相関関係を、見かけの相関関係を因果関係として誤って解釈したのである。確かに貧困家庭の子どもは学力が低い、これは見かけの相関であるにすぎない。経済格差は低学力の真の原因ではないのである(内田, 2017c; 2017d)。高所得の家庭では、家庭の文化資源が豊かで、蔵書数も多い。親子で旅行に出かけたり、美術館や博物館にも出かけるなど子どもの体験を豊かにする機会が多い。親は子どもの主体性を大事に、子どもを人格をもった存在として、子どもの主体性を尊重する関わりをしていることが多い。

「洗練コード」と呼ばれることばで話しかけ、子ども自身が自分で考え、判断する余地を与えようとする。難関につきあたたかときには、子どもといっしょに考える。子どもがよいアイデアを出すと、誉め、認める。子どもの考えが行き詰まっているように見えるときには、視点を広げるようなことばかけやヒント、助け舟を出して、子どもの考えが先に進むよう援助する。このような会話を通して、子どもは自信をもち、意欲や挑戦力もわいてくるだろう。

**【提言】 親や保育者ができること**

「50の文字を覚えるよりも、100の『何だろ?』を育てたい」ものである。自分から本当にやろうとしないと自分の力にはならない。自分で関心を持てばあっというまに習得してしまう。文字は子どもの関心の網の目に引っ掛かってくるにすぎない。肝心なのは文字が書けるかどうかではなく、文字で表現したくなるような内面の

育ちである。乳幼児期から児童期にかけての発達課題は創造的想像力を育むことである。親や保育者は次のようにかかわっていただきたい。

第1に、子どもに寄り添い安全基地になること。

第2に、その子自身の進歩を認め、ほめること。

第3に、生き字引のように余すところなく定義や説明を与えない。

第4に、裁判官のように判決を下さない。禁止や命令ではなく、「～したら？」と提案の形で子どもの意志を確認していただきたい。

第5に、子ども自身が考え、判断する余地を残すこと。

大人が子どもの主体性を大事にした関わり方をすることによって、考える力や想像する力が育まれる。保育者や親は、子どもが質問したとき、すぐに回答や解説をしなideいただきたい。我が子がどんなところにつまずき、どこに疑問を感じて先に進めないのかをよく洞察してほしい。子どもがつまづいている点が洞察できれば、「足場 (scaffolding)」(Werch, & et. al., 1980; Bruner, 1981) を架けて子どもが一步踏み出せるように援助することができる。大人が適切な足場をかけてあげれば、幼児であっても科学者が辿るような仮説検証の過程を自力で達成できるのである。孫と郊外に散歩に出かけたとき、みやこぐさの花に注意を引かれ、その花の名前を問われた祖父、渡辺万次郎教授 (高橋, 1962) は、花の名前を教える代わりに、さらに探求するための足場をかけたのである。以下にそのエピソードを示す。

「これにもお豆がなるの？」

私はかつて幼稚園の二児を近郊に伴った。彼らは「みやこぐさ」の花に注意を引かれたが、その名を問うほかに能がなかった。当時、私どもの菜園には、同じ豆科の「えんどう」の花が咲いていたので、私は名を教えるかわりに、その花を持って帰り、おうちでそれによく似た花を見出すようにと指導した。彼らが帰宅後、両者の類似を見出したときには、小さいながらも

自力に基づく新発見の喜びに燃えた。やがて1人は「みやこぐさ」について、「これにもお豆がなるの？」とたずねた。それは誰にも教えられない、独創的な質問であった。

私はそれにも答えず、次の日曜に彼らに現場で確かめることを提案した。次の日曜に彼らがそこに小さな「お豆」を見出したとき、そこには自分の推理の当たった喜びがあった。秋がきた。庭には萩の花が咲いた。彼らは萩にも豆のなることを予測した。』

彼らは過去の経験から、いかなる花に豆がなるかを自主的に知り、その推論を独創的にまだ見ぬ世界に及ぼしたのである。

(下線部は筆者)

[高橋金三郎 『授業と科学』 麥書房, 1962年, 149-150頁より引用]

子どもが疑問をもち質問したときにはすぐに答えを与えてしまわずに、子ども自身が自力で探究できるように足場を架けてあげてほしい。大人のこのようなかわりを通して自律的思考力や創造的想像力が育まれるのである。大人ができるのは足場を架けるところまでなのだ。足場を上るか、どんな作業をするかを決める主人公は子どもなのである。

#### 【引用文献】

- 東洋 (代表) (1995) 「幼児期における文字の獲得過程とその環境的要因の影響に関する研究」『平成4～6年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究報告書』。
- Bruner, J. (1981) *The process of education*. MIT press.
- Flecher, K. L. & Reese, E. (2005). Picture book reading with young children: A conceptual framework. *Developmental review*, 25, 64-103.
- 浜野隆・内田伸子・李基淑・周念麗・Dihn Hong Thai・Jamstandori Batdelgel・後藤憲子 (二〇一二) 『幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響—保護者調査・保育者調査—日韓中越蒙5カ国比較』お茶の水女子大学グローバルCOE格差センシティブな人間発達科学の創成国際格差班プロジェクト報告書, 二〇一二年 (Japanese & English Edition)
- Kang, J. H., Kim, Y. S., & Pan, B. A. (2009) Five-year-olds' book talk and story telling: Contributions of mother-child joint bookreading. *First Language*, 29, 243-265.
- 齋藤有・内田伸子 (2013a) 「母親の養育態度と本の読み聞かせ場面における母子相互作用の関係に関する長

- 期縦断的検討』『読書科学』第55巻, 第1・2号合併号, 56-67.
- 齋藤有・内田伸子 (2013b) 「幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響: 共有型と「強制型」の横断的比較」『発達心理学研究, 第24巻, 第2号, 150-159.
- 内田伸子 (1989) 「物語ることから文字作文へ—読み書き能力の発達と文字作文の成立過程—」『読書科学』第33巻, 第1号, 10-24.
- 富山尚子 (2003) 『認知と感情の関連性—気分の効果と調整過程』風間書房
- 内田伸子 (1989) 『まごころの保育—堀合文子の言葉と実践に学ぶ』小学館.
- 内田伸子 (1999) 「発達心理学—ことばの獲得と教育—」岩波書店.
- 内田伸子 (2008) 『幼児心理学への招待—子どもの世界づくり<改訂版>』サイエンス社.
- 内田伸子 (2017a) 『発達の心理—ことばの獲得と学び』サイエンス社.
- 内田伸子 (2017b) 『子どもの見ている世界—誕生から6歳までの子育て・親育ち』春秋社.
- 内田伸子 (2017c) 「学力格差は幼児期から始まるか? ~経済格差要因を超える要因の検討」『教育社会学研究』第100集・特集境界を超える教育社会学研究, 100-119.
- 内田伸子 (2017d) 「子どもの貧困と学力格差—貧困は超えられるか?」『学術の動向』第22巻, No.10, 24-28.
- 内田伸子・浜野 隆・後藤憲子 (2009a) 『幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響—日韓中越蒙比較研究, 2008年度調査の結果—』グローバルCOE国際格差班報告書.
- 内田伸子・浜野隆・後藤憲子 (2009b) 『幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響—日韓中越蒙国際比較研究: 2008年度日本報告』お茶の水女子大学グローバルCOE格差センシティブな人間発達科学の創成国際格差班プロジェクト報告書.
- Uchida, N. & Ishida, Y. (2011) What counts the most for early literacy acquisition?: Japanese data from the cross-cultural literacy survey of GCOE Project. *PROCEEDINGS; Science of Human Development for Restructuring the “Gap Widening Society”, SELECTED PAPERS*, 6, 11-26.
- 内田伸子・李基淑・朱家雄・周念麗・浜野隆・後藤憲子 (2011) 『幼児期から学力格差は始まるか—しつけスタイルは経済格差要因を凌駕し得るか—【児童期追跡調査】日本(東京)・韓国(ソウル)・中国(上海)比較データブック』お茶の水女子大学グローバルCOE格差センシティブな人間発達科学の創成国際格差班プロジェクト報告書.
- 内田伸子・浜野隆 (編著) (2012) 『世界の子育て—貧困は越えられるか?』金子書房.
- 渡辺万次郎 (1962) 「これにもお豆がなるの?」, 高橋金三郎『授業と科学』麥書房, 149-150.
- Werch, J. V., McNamee, C. D., McLane, J. B., & Budwig, N. A. (1980) The adult-child dyad as a problem-solving system. *Child Development*, 51, 1215-1221.